

# 『魯西亜語覚書』について

岩 井 憲 幸

はじめに  
本館洋学文庫中に『魯西亜語覚書』と題する小

本が存する（以下△早大本Vと略称）。この本は内容から日露語彙集としてよいと考えるが、今日まで本書について紹介したものが見あたらないようである。よって日ごろ閲覧して得たところをここにノー

ト風に記述しておきたい。早大本はわが国におけるロシア語研究史上、あるいは重要な位置を占めうると考えるからである。

書誌  
早大本の体裁その他についてまとめると次のようである。

函架番号 文庫8・C842

（特別図書）

大きさ タテ一三七×ヨコ二

二七耗前後。

形状 和小横・四針眼。写本一冊。

題簽 なし。ただし白茶の表紙左にじかに墨書きで△幸太夫<sup>（ハヤタ）</sup>

魯西亜語覚書Vとある。後人の筆であろう（写真1。後述）。

内題 △ОРОСІЯ 魯西亜<sup>（ロシア）</sup>TOOTLO言語V（写真2。補注。

\*なおこの下にKで始まる書きつけがみられるが判読できず。

紙数 六八葉。ただし丁付けなし。

体裁 非語彙集部では毎半葉行数不定。語彙集部では毎半葉

一二行、上下二段。

蔵書印 △西成文庫V——朱文。表紙右上および扉右下。

△早稲田文庫V——朱文。扉右上。

△勝俣氏旧蔵書V——朱文。表紙ウラ左下。

旧蔵者 勝俣詮吉郎

内容は大きく(A)非語彙集部分と(B)語彙集部分とに分けられ、(A)は八葉、(B)は五六葉。したがって見方によつては、(A)は(B)の付録のような観をあたえる。しかし(A)の内容はさまざまであつ

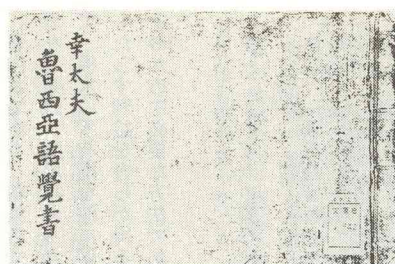


写真1 『魯西亜語覚書』表紙

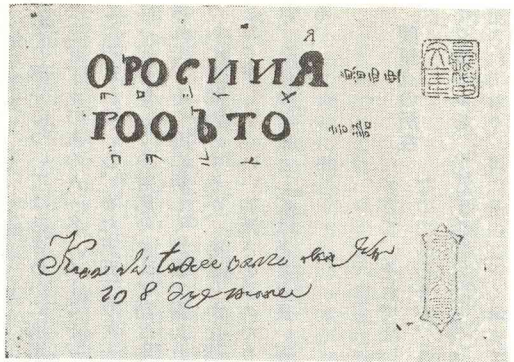


写真 2 同 原

て、次のような項目を含む。

- ①合音 ②ロシア字母 ③数詞と日付 ④アラビア数字 ⑤ロシア文字による五十音 ⑥日月・刻法 ⑦幸太夫の漂流事情 (部分的)

このうち①②⑤はロシア文字をもって大書され、これにかたかなによる読みが付される。③は日本語の右脇にロシア語がかたかな書きでルビのごとく付されている。この(A)部分についてはさまざまな問題——ことにその出所の問題——が存するが、いまは触れなくておくことにしよう。

さて(B)だが、これは前述のごとく、日露語彙集であって、日本語の見出し語の第一音節のみをイロハ順に分けている。各項ハいVからハすVまで、まず初めに大字で標示するが、いま大字をもって示された各項をハ部Vと名づけければ、部はイロハ四七すべて揃っているわけではない。すなわちハる・ゐ・オ・

『魯西亜語彙書』について

えVの四部は、部名の標示も登録語も有しない。ハる部Vはまったく登録語をもたないといえるが、しかし他の三部は当時一般と同様になづかい上よりも、表音的にのおのハい・を・ゐVに統合されているとみられる。さて各部はハ一石・カカメニVのごとく、おのおのまずハ一Vとことわって日本語を示し、その下段にかたかな書きで対応のロシア語を示している。ただハよ部Vの初めハ一四日 チェテルトエVの項の右に *чѣтвере дня* とロシア文字で原語が書きそえられてあるが、これは(B)における唯一の例外である。見出し語は第一音節のみをイロハ順に配し、といったが、ハけ部Vにハ一筆ペラVとあったり、また語の重複もまみられるのである(例ハみ部Vにハ湊 *ベリスクニV* とハ湊 *ピリチスタニV*)。またハは部Vにハ一樽 *モースV*、ハわ部Vにハ一恋 サブウVとあったりして日露両語の齟齬がみられるのである。この例の場合、日本語見出しの所属部名と、下のロシア語の意味から考えれば、ハ橋Vハ忘Vが日本語見出しとしては正しい(注1)。しかしいづれにせよハ一Vの下にまとめられる日露両語を登録語の一項と算定していくと、次表のようになり、全体として一、一〇六項含むことになる(注2)。

(A)(B)双方にわたって随所に朱と墨の加筆・訂正がみられ、きわめて煩わしい。また早大本はもと横の長さが現在よりやや長めであったらしく、たとえば三五丁においては端が文字にかかって切れていることから、後に裁断されたものであらう。この

65	31	こ	え	て	あ	き	ゆ	め	み	し	ゑ	ひ	も	せ	す
18	58	28	45	14	8	27	65	8	34	18	15	31			
70	4	48	20	21	5	23	34	4	8	—	52	25	67	28	32
い	ろ	は	に	は	へ	と	ち	り	ぬ	る	を	わ	か	よ	た
3	12	22	8	37	4	12	22	—	14	—	38	17	23	10	18
れ	そ	つ	ね	な	ら	む	う	ぬ	の	の	く	や	ま	け	ふ

各部登録語数一覽 計1,106

くる・あ・お・えの各部について  
は67ページ参照

文字の部分についてはあきらかに別筆でなざりがあり、たとえば三五丁オの末のハ一名 イーミヤVは、ハイーシアVと誤つてなぞられている。また三五丁ウ・一行目ハ一何ぞ上ケ度が爰にハ何も無いVの対応のロシア語はもとの部分が黒くぬりつぶされて、その脇に新しく別筆で書かれている。朱・墨の加筆はのちにも問題とするが、あきらかな誤り以外にも、日本語見出しのくずし字のいい加減さを改めたりしているものも多くみられ、全体の印象としてはあまり良い写本とはいえないようである。

## 問題点の所在

さて、それではいったい早大本の編者は誰なのであろうか。この点について吟味しておく必要がある。『洋学文庫目録』(稿、昭和四六)にはハ自筆本Vと記されており、現にそのごとく考えているむきもある(注3)。

結論的にいって、筆者はこの見解に否定的である。表紙にハ幸太夫魯西亞語覽書Vとあるが、これは後人の筆であって、信用するにたらない。あるいは他に根拠があるものとも思われるが、寡聞にしてこれを知らない。扉にあるハОРОСІЯ 魯西亞/TOOPTO 言語Vがおそらくはもとの表題と私考するが、こちらにせよ意味が不分明である。ОРОСІЯはРОССІЯの日本語訛りと解することができるとしても、TOOPTOは妙である。bは(A)の二丁オにハエル エールVと字母名がみえているが、いずれにせよ硬音符と称されるもので、今日も当ても音価を有しない。

ところが、(B)七丁ウのハロシア文字による五十音Vのラ行はハPA PИ Pи Pи Pи PO P Vとあって、P/bが混用されている。Pもおなじく三丁オにハエラ ウルチユイVと字母名がみえるが、これとbの字母名が近似していることから、誤って混用していると解される。

したがってTOOPTOはTOOPTOであろう。扉ではTOOPTOにハ言語Vの訳があるから、その意味とすれば、(B)語彙集部分のハこ部Vに登録されているハ一言葉 ゴホルVにあたるのではなからうか。しかしОРОСІЯがРОССІЯ/TOOPTOがТОВОРЬと解したところで、全体としてはロシア語として意味をなすものではない。おそらくはロシア語の原語は飾りのようなものであって、ハロシアの言葉Vを意味するハ魯西亞言語Vをまったく直訳することによって、かかる表



題ΛΟΡΟСИЯ 魯西亜/ТООБТО 言語Vが生じたものであらう。

ところでここに、早大本の書名はおろか、Λ編者Vの問題にきわめて密接に関係する他の一本が存在するのである。それは天理図書館所蔵の『魯西亜語類』である（以下Λ天理本Vと略称）。

天理本は現在のところ内題（筆者の早大本という扉）にロシア文字でΛΟΡΟСИЯ ТООБТО/ТАНАБЕ ЯСЫ300Λと書かれていることから、幕吏の田辺安蔵によって編纂されたと推定されている（注4）。田辺は寛政四年（一七九二）一〇月末から翌五年二月末まで、ラクスマン遣日使節団の応接のため、根室に滞在している。ここで接した光太夫やラクスマン一行から得た知識の集成として、天理本が成立したと解されてもいるのである。天理本は次のように紹介されているが、早大本に比して紙数が大幅に違うものの、形状等はほぼ一致しているのである。

横帳綴。写一冊。全百九丁。縦一三・九厘×横二〇・二厘。

白地に淡黄色の唐草模様を刷付けた例の楽翁表紙、題簽左肩、松平定信筆にて「魯西亜語類」<sup>第四十二（朱書）</sup>、内題はロシア字にて

「ΛΟΡΟСИЯ ТООБТО/ТАНАБЕ ЯСЫ300」とある（注4）。

しかもこの紙数にしても、本体というべき(B)語彙集部分については、早大本が一、一〇六項に対し、天理本が一、一二二項と

数の上で六項の差しか存しないのである（注5）。天理本の題簽にしても引用のごとく定信の筆であり、内題および語彙集本文の意をくんでの命名と解してよい。とるべきは天理本内題ΛΟΡΟСИЯ ТООБТОVの早大本との一致である。

\*だが、天理本の書名について一言すればΛ語類Vという名を冠するのは、内容からみて適切とはいえない。この点、早大本のΛ覚書Vの方が当を得ているといえよう。

さてここで(A)(B)にわたってどの程度に内容上一致をみるか、次表で示しておこう。項目の有を○、無を×、一部分の有を△とする。

非語彙集部

	項	目	早大本	天理本
1	扉	ロシア事情	○	○
2		ロシア国内の諸種族名	×	○
3		世界五一国名	×	○
4		合音	○	○
5		ロシア字母	○	○
6		数詞と日付	○	○
7		アラビア数字	○	○
8		ロシア文字による五十音	○	×
9		日月・刻法	○	○
10		光太夫の漂流事情	△	○
11		ロシア官職名	×	○
12				

1の扉だが、天理本ではロシア人らしい人物像が描かれているが、早大本にはない。また11の漂流事情は天理本の初めの一項のみが、早大本にみられる。早大本はこの(A)に八葉余を費やしているのに対し、天理本では一二葉半費やしている。さらに内容に目を転ずれば、天理本は9のみが欠ける。早大本の側にたてば、5・10は、2・3・4・12に比較してより語学的な内容をもっており、早大本はむしろこちらを主眼としたとも解釈できよう。天理本はこれに対し、極言すれば語彙集本体とは関係のないと考えられる周辺の八事情Vをも収録しているわけであり、この点にも編纂者と目される田辺の意向——定信への献上本であり、定信の八外夷書集Vに加えられた天理本——が読みとれると思われる（さらにいえば、天理本では(A)部分が主であつて(B)部分は付録的なものであつたと解せないこともない）。

(B)部分における登録語の数は、次表の八部でのみ違つてゐる。

と	ほ	部	早大本	天理本	と	ほ	部	早大本	天理本
23	21	部	早大本	天理本	32	67	部	早大本	天理本
22	24	部	早大本	天理本	33	68	部	早大本	天理本
た	か	部	早大本	天理本	37	22	部	早大本	天理本
36	23	部	早大本	天理本	36	23	部	早大本	天理本
な	つ	部	早大本	天理本	も	め	部	早大本	天理本
18	8	部	早大本	天理本	19	9	部	早大本	天理本

全体として早大本の一、一〇六項に対し、天理本は一、一一二項。数の上では六項の差だが、内容的には次の八項が天理本にあって、早大本にはみられない登録語である（一）内は所属部名）。

- 1 骨 コステ 又グローチエ（ほ）
  - 2 骨の次目 ソスターフ（ほ）
  - 3 奉公精出ます ザスルガ（ほ）
  - 4 皮衣 パアルカ（か）
  - 5 魂 ハツメ 又ラズム（た）
  - 6 安イ チエナデセワ（つ）
  - 7 目出度イ ポズドロウリヤイ（め）
  - 8 持て行ク ウニヨース（も）
- さらにまた、前述した早大本の加筆・訂正は、多くの場合天理本と一致をみる。

こうした点からいって、早大本と天理本とは、なんらかの関係を有するものと考えられる。

早大本が光太夫の自筆本であるとすれば、天理本もすくなくとも(B)部分においては編者は田辺ではなく光太夫とすべきであるし、また逆に天理本が田辺の編とすれば、早大本の編者もまた田辺といわざるをえなくなってくる。早大本の自筆如何は、たとえば本館蔵の『露国国民学校用算術入門書』などの光太夫自筆書入れとの照合によって判明すると思われるが、そのおおよその比較によつても光太夫自筆の可能性はうすい。これをさらに傍証するものに、とくにロシア語のかたかな書きの検討がある。当時日露両語に通じたのは、漢字・ロシア文字の使用まで含めれば、光太夫をおいては考えられないであろう。しかし早大本のロシア語かたかな書きにおいて、一三〇カ所ほども





されていたのかもしれない。

さらに想像するに、ロシア文字の原語がはじめにあつて、これに誰かがかたかなで読み（発音）を付していったのかもしれない（注6）。早大本、天理本ともに、ロシア文字それ自体を問題とする場合は別として、これがことばをなす場合には、かたかな書きで示されるのが原則である。おそらくは便宜上多少の訛りを覚悟してでも、自分たち日本人が読みうるかたかな書きの単語集が要求されたのではなからうか。

とすれば写本作成の段階で、ロシア文字による原語は意識的に排除され、かたかな書きのみが残った。さらにロシア語の知識の欠如から、第三者の転写の際かたかなの混同を惹起し、結果的には誤ったかたかな書きロシア語を生じたという推測も成り立つ。

ここで底本の段階において、ロシア文字の原語にかたかなルビを付したのは、光太夫である可能性は高い。しかし証明はいまのところ困難である。

またひるがえって、底本にロシア文字による原語がなかったものとすれば、そしてこれに光太夫が関与していないとすれば、田辺の編者説もとりうるであろう。彼の場合は、ロシア語の知識が完全ではなかったであろうから、この説も考慮に入れることができる。

しかし天理本は松平定信への献上本であることは再三にわたって問題としたが、ここでも言及すれば、内題に田辺の名がみ

えていても、初原的な底本の編纂にどれほど関与したかは、まったく保証されるものではない。あるいは底本の整理、浄書程度の関わりであっても、献上本としての性格と当時の風を考えれば、△田辺安蔵編▽にもなりうるといえるであろう。

したがって、早大本、天理本には共通の祖本（「魯語いろは引」とでも名づけられようか）があつて、両者はそれぞれその転写本と考えたい。早大本と天理本との直接的な書写関係は、おそらくないと考えるが、その断定は後究をまちたい。

**結び** 以上述べてきたところを要約すれば、早大本『魯西

底本から派生した写本と考えたい。この初原的な底本には光太夫が関与したと想像されよう。

天理本『魯西語類』は目的の異なった一本——ロシア事情に興味があり、したがってA部分がこの本の主である。B部分はその付録的なもの——というべきものであつて、田辺安蔵がこれに関与し、松平定信に献上された。別の一本、早大本『魯西語類』は底本の原形に近い、それでいてラフな写本と推量しておく。そしていずれにせよ、早大本は光太夫の自筆本ではないと私考する。

早大本、天理本の底本の編者を推定するにあたっては、今日報告されている江戸期のロシア語学関係書『北棧聞略』『魯西亜弁語』『魯西亜文字集』、さらに性格未詳の『魯西亜寄語』と

の比較考察が当然に要求されるところである。その前に天理本と早大本との校合によって、テキストを再構成しなければならぬ。この再構成と内容の検討については、筆者は別稿にて発表する予定である。

小論では、早大図書館蔵のこの『<sup>(Cv)</sup>幸太夫魯西亜語覚書』が、光太夫の自筆ではないこと、また天理図書館蔵の『魯西亜語類』とはある種の関係を有すること、の二点についてあえて論じてみたのであるが、先学者よりのご教正を切にお願い申し上げます。

末筆ながら、ご指導をいただいた新谷敬三郎、杉本つとむ両先生にあつく御礼を申し上げます。

注1 こうした誤りは、ロシア語を解するものであれば、生じがたい。後に述べる、編纂者ないし、写し手の性格を反映している。

注2 <sup>異風</sup>ハ一 <sup>異言</sup>乃人 <sup>異字</sup>イノワーレツV、ハ一指 パアルツ一

<sup>大指</sup>ハ一 <sup>中</sup>ボラシヨイ <sup>小</sup>ウカザラリノイV <sup>スレニ</sup>のような項もハ一Vの下でまとめられると考え、一項と算定した。

注3 亀井高孝・村山七郎・中村喜和『魯西亜弁語』（近藤出版社、昭和四七）二〇ページ。

注4 石川真弘・大内田貞郎・金子正・河合忠信・木村三吾ハ魯西亜語類V（『ビブリア』四五号、昭和四五）。

『魯西亜語覚書』について

注5 登録語の算定方法は早大本の場合に同じである。なお「ビブリア」誌上ではハ一一〇七語Vとするが、これは算定の仕方の違いか。

注6 原語の供給源——ひいては語彙集部分の底本というべきもの——が、露書であった可能性は強いが、いまはこれ以上述べない。また当然ながら先に問題とした内題のАРОСКИЯ 魯西亜 FOOTOTO 言語Vも、この露書の書名と関係するであろう。

補注 扉ウラにも二つの記事がみられる。ともに上方にあつて、まずRで始まる欧文（未詳）。ついでその下に記号が二つある。ともにかたかなでハブデ、ガリVと名称を付している。これらの記号は、後述の天理本扉ウラにも存在するものである。

（本学第一文学部副手）